

# 一匹の孤独な蠅

—『春のうた』に於けるT. グレイとその不安—

山 本 博 信\*

## A Solitary Fly

—Gray and his uneasiness in the *Ode on the Spring*—

Hironobu YAMAMOTO

Salve vocanti rité, fesso et  
 Da Placidam juveni quietem.  
 Quod si invidendis sedibus, et frui  
 Fortuna sacrâ lege silentiij  
 Vetat volentem, me resorbens  
 In medios violenta fluctus :  
 Saltém remoto des, Pater angulo  
 Horas senectæ ducere liberas ;  
 Tutumque vulgari tumutu  
 Surripias, hominumque curis. <sup>1)</sup>

おん身よ、もし私が御名に祈るのが正しければ、願わくは、もはや疲れてしまった若者に静かで平和な休息を許したまえ。しかし、もし私の願いの甲斐もなく、運命が再び私を世の荒波のまっただ中に引き戻し、このうらやましいすみかと静寂のおおう聖なる所に憩うのを今は禁ずるのであれば、少なくとも、父なる神よ、願わくは私が年老いた時、どこか人里離れた奥所に頼いもなく暮させたまえ、世俗の騒がしさと人間の不安のない安全な所へ私を隠したまえ。  
 一大意<sup>2)</sup>

これが2年半に亘る華やかな大陸旅行 (grand tour) を終えようとしている若者が書いたものだとはとても思えない。グレイはこれを書いて20日足らずして、1741年9月1日、ロンドンに帰着しているのである。

大陸旅行はケンブリッジ大学を退学して、身の振り方に思案しているグレイを親友 Walpole が誘ったもので

ある。費用は全部 Walpole 持ちで全く対等の関係で旅行をすると云う Walpole の申し出に、グレイがよるこんで応じたものだった。ところが、帰国途中、1741年4月24日、レギョで2人は喧嘩してしまった。グレイは Walpole と別かれて帰途につき、途中、グランド・シャルトルーズの修道院に立寄った。上掲のラテン語による詩はその参拝者記名帳に記されたものである。

グレイには大陸旅行以前から不活発で憂鬱な気分があったのである。

憂鬱はぼくの本当の忠実な友達です。ぼくと一緒に起き出し、ぼくと一緒に床に入り、どこへ出かけるのも、ぼくのする通りです。そうです、その上、ぼくと一緒に人を訪ね、わざとおどけてみせ、そして無理して弱々しい笑いをつくったりします。でも大抵はぼくらは2人きりで居ます、ぼくらはこの世でもっともすばらしい退屈な仲間です。<sup>3)</sup>

これが親友 Walpole との訣別で一気に吹き出したのである。楽しく晴々した気持で帰国する筈だったグレイは、すっかり憂鬱な気分をいだいて帰国したのである。時めく時の総理大臣 Sir Robert Walpole の息子 Horace Walpole の同伴者としてヨーロッパの上流社会の華やかな生活に酔いしれていたグレイは、レギョでの喧嘩により、恰かも掌を裏返すようにその豪奢な上流生活の夢とも訣別し、きびしい英国の現実に帰らなければならなかった。この「明」から「暗」への軽業的転落は若いグレイに強い衝撃を与えたに違いないのである。後にその作品に表わされる「人生のはかなさ」「地上的華麗さの空しさ」「苦しみへの不可避性」「孤独の有難さ」などはこ

\* 宇部工業高等専門学校英語教室

の中で感じられたのである。この社会に対する懐疑心、不快感はこの世（世俗と云ってもよい、物質世界と云ってもよい、地上的世界と云ってもよい）に於ける顕現性を本質的価値のないものとして斥けるのである。それだけならことは簡単なのである。一直線にいやな世をとび出し、この世俗的でない世界（つまり世俗から見て異常の世界であり、非世俗の世界である。理念的世界、倫理的世界、理想の世界である）に逃避すればそれでよいのである。それは単なる隠遁者の姿である。

しかし、グレイのそれは決して単なる隠遁者の姿ではなかったのである。成程、表面的にはあるいは最終的には、グレイは「この世」的でない、つまり世俗的でない世界、異常の世界にとび込み、そこに孤独を求めた。しかし一方ではグレイの心奥には夢と果てるものへの淡い憧れのようなものが、どうしても吹っ切れずに在るのである。彼はこの孤独と云う非世俗的な世界に単純に在ることに甘んじていることはできなかったのである。孤独を求めながら彼は実はこの中で常に不安におびえ、苛立ち、もがき、苦闘していたのである。本質的価値（その為生きる価値）のないものとして世俗的地上的顕現性を斥けながら、グレイは顕現性それ自体は決して斥け得なかったのである。ここにグレイの一見不徹底があり、W. Empson<sup>4)</sup>をして‘social snobbery’<sup>4)</sup>と言わしめたものがあるのである。彼が常に自己の存在を非世俗的なもの（理念的倫理的世界＝自己の内的一面でもある）として主張し弁明しながら、常に世俗的なもの（物質世界＝彼のもう1つの一面）を意識していた理由があったのである。

しかしこれこそが恐らくグレイの存在と創作の原点なのである。グレイの作品を完全なる自己表現だ<sup>5)</sup>と云える理由も十分ある訳である。事実、グレイの作品は、不安から己を守り対立する自我をなだめ満たすために、孤独の世界に、もはや、単純に孤独とは云えない孤高 aloofness<sup>6)</sup>とも呼ぶべき己の堅固な城を構築しようとする企てであった。彼の作品を貫くテーマの1つは世俗的なものを「拒む心」とこれを「求める心」とのかかわり合いであったと言える。M. Goldenも云うように、「常にその奥底には、恐怖におののいているが野心にもえる魂がひそんでいる」<sup>6)</sup>のである。

一人の人間がその与えられた社会の中でどう自分を処理して行くか、どう生きて行くかと言う問題ほどぼくらにとって切実で難解な問題はない。この古くて新しい問題ほど常に今日的である問題はない。T. グレイが今日ぼくらに関心を引き起こすものがあるとすれば、それは

物質世界を拒絶しながらそれを容易に超克しえない自我の葛藤と模索の姿であり、孤独から孤高へ脱皮を試みる求道者の姿であろう。

『春のうた』*Ode on the Spring*はこうしたグレイの試みと営みの事実上の出発点になっている。ここではその出発点、原点となっている『春のうた』に於けるグレイの内的葛藤を明らかにし、作中の象徴的暗示的イメージ、‘a solitary fly’（「一匹の孤独な蠅」）の意味するものを探ってみる。そのことによって、『春のうた』以後の詩に於ける彼の相対立する内的二面の消長を跡づけ、この『春のうた』が提示する不安からの脱皮がどのように行なわれ、どのような世界が構築されるかを知る手がかりとしたい——そう云う展望に立って『春のうた』を見るのも無駄ではあるまい。

## 1

親友 Walpole と喧嘩別れしてグレイは2年半ぶりに英国へ傷心を抱き、文字通り夢から醒めて帰ってきた。実際、彼は帰国後一週間のちの手紙の中で、自分の母国へ帰って来ているながら何か異邦人のような困惑感、疎外感を訴えているのである。<sup>7)</sup>そして2ヶ月後の11月には父親を痛風で失ったのである。長年の友<sup>8)</sup>を失って華やかな世界は一夜の夢の如く去り、その上に父を失ったのである。あのグランド・シャルトルーズの修道院の「世俗の騒がしい争いや人の煩いから救ってくれ」と云う彼の憂鬱な厭世感が更に進んだとしても不思議ではない。1742年5月27日付の親友 West への手紙はグレイの鬱積した気分が定着化したことを示している。

ぼくのは、お分りのこととは思いますが、大抵は白い「憂鬱」、と云うよりは「白胆汁」と云ったものです。それは笑うとか踊るとか云うことはめったになく、ましてやよくいう「喜び」とか「楽しみ」とかとは無縁のものなのですが、それでもそれは一種、心地よい骨の折れない気楽な状態であって、「とにかく私は気を紛らしている」のです。その只一つの欠点は活気がないことです。このために時折、何でもない下らぬ望みを人に抱かせる一種の「倦怠」<sup>アンニユイ</sup>がとりつきます。<sup>9)</sup>

友と別れ父を失い将来の見通しも立たぬ青年に、喜びや楽しみがある方がむしろおかしいのである。『春のうた』はこの憂鬱の手紙が書かれた頃<sup>10)</sup>書かれた作品である。そしてこの詩の‘me’なる詩人グレイ、つまり‘a

solitary fly' と手紙のグレイとが、その気分を一にしていることは一読して分かるであろう。

大陸で長い友情がふとしたことで不意に切れてしまう。華やかな贅沢な生活はすでに自分とは無縁のものとなっている。あまり優しくもなかったとはいえ、父親が永遠に姿を消した。自分は今から何をしようかとその身の振り方も定まっていない。こうした状況の下の青年が外界に対して自己を閉ざし、人生のはかなさ、人間のもろさ、むなしさに思いをめぐらすことはよくあることである。閉ざされた自己の内へ沈滞して行くのである。そうした己の姿が自嘲的に己の目に映じてくるのである。

詩は一見この沈滞した隠遁的な憂鬱で一面塗りつぶされているが、内は冷徹に燃え、眼は冷静に牙えわたり、胸は世俗への関心でうずいているのである。それだけでなく、春を春としてたたえず春をその明るさの故にけなすような詩の中でさえも、およそその春とは正反対の **obscure** な存在である己を讃美することをどうしておさえられようか。春をはかないものとして斥ければ、当然のこととして反春的存在は **attractive** なものとして認識されなければならない筈である。

ところが、その反春的存在である 'a solitary fly' は全然 **attractive** な存在として認識されてはいないのである。やはり春的存在と同様半ば斥けられているのである。いや、これは少し言葉が過ぎたかも知れない、が少くとも反春的なものが春的なものと、最終的、結果的には、大体同様の扱いを『春のうた』に於いては受けているのである。このことはとりもなおさず、'春的なもの' = '反春的なもの' の関係を示すのであって、反春的なものを装っている 'a solitary fly' なるグレイは、結局、春的でもあるということ、つまり反隠遁的なものとしても認識されていることが明らかになるのである。

これは日常性に埋没するグレイに於いてもよく見られるところであって、彼が現実の中で挫折し現実を遠ざかれば遠ざかるほど意識の中では現実に近いところとする、現実の明るい面に踊り出ようと彼はするのである。Walpole からの離別で駄目になったけれども、あるいはグレイ自身も彼の威光に出世の道の期待をかけていたかも知れない。<sup>11)</sup> もしそうだったら、グレイはますます心の中では出世の道の手掛りを求めたに違いないのである。グレイと云う男はそういう所があるのである。これは大分後のことであるが、<sup>12)</sup> **Poet Laureate** の地位を **C. Cibber** の死により **offer** された時も、彼はそうであった。あんなものは 'a rat catcher' なる給金取りの人気商売だといって威勢よく辞退するまではよいのであ

るが、一方ではその辞退が本当に受理されはせぬかと心配する<sup>13)</sup>と云った調子である。この傾向は当然作品にも多く表われていて、列挙すればきりはない。例えば、『エレジー』より少し後に書かれた *Long story* (『長物語』) に於いて、貴婦人が詩人(自分のこと)を訪ねて来るが、こういう手合いにかかってはかなわぬとばかりうまく逃げ出す。

On the first marching of the troops  
The Muses, hopeless of his pardon,  
Convey'd him underneath their hoops  
To a small closet in the garden.

—ll. 69—72

(女軍のはじめ、現われた時、  
すでに逃げる道なしと詩の神々は  
詩人を裳裾の下に入れて、  
庭の茶室へ運んで行った。一福原訳<sup>14)</sup>)

ところがその婦人たちの残して帰った置手紙に「心の乱れを感じ」、<sup>15)</sup>結局、抗し切れないのである。

この斥りぞけながら振り切れない、逃げながら追い求める、つまらぬと言いながら一方で捨て難いものとして憧着して行く—この矛盾が、この煮え切らぬ悶々たる不徹底が、その憂鬱病に付着してグレイにはあったのである。このグレイの濃縮された姿、原形こそが、'a solitary fly' なのである。'a solitary fly' は、かかる矛盾を共存させ苦悩するグレイの分身として『春のうた』に現われてくるのである。それは少しずつ姿を変えながら、『イートン校のうた』における 'I'<sup>16)</sup>「私」なる詩人、『逆境をたたえて』の 'thy Suppliant'<sup>17)</sup>を経て、『エレジー』の 'thee'<sup>18)</sup>なる「幸運にも名声にも知られざる若者」「誰か名なき詩うたわぬミルトン」へと引き継がれてゆくのである。

従って、『春のうた』における「一匹の孤独な蠅」'a solitary fly' はグレイ及びその作品に流れる諸要素を暗示的に内包するイメージだと云えるのである。およそグレイを一言で言い表わすのに、この「一匹の孤独な蠅」というイメージほど適切なものはない。これほど当時のグレイを象徴し、後のグレイを暗示する重要なことばはない。しかも1742年の堰を切っておとしたが如き一連の爆発的創作の巻頭を飾る詩『春のうた』において、グレイが己を「一匹の孤独な蠅」として提示したことは、彼の並ならぬ決意と意気込みをうかがわせるものである。あたかもグレイは己の矛盾と不安に本気で取り組むことを覚悟しているかのようにぼくには感じられるのである。

それは一つの戦いの開始を宣しているようでもある。たとえ無意識ではあっても、グレイはこの 'a solitary fly' によって取り組むべき深刻な問題を自分自身に向って投げつけているのである。そしてそれは以後の作品に引きつがれ解決されねばならなかったのである。事実、『春のうた』は、矛盾と不安にみちたこの「孤独なる蠅」によって、グレイの詩における一つの重要な問題提起になっているのである。

## 2

『春のうた』は決して春を謳った詩ではない。それは詩人自身の ironically に矛盾したどうしようもない内面を告白した詩である。自分を 'a solitary fly' (一匹の孤独な蠅) として自嘲的に認識する他ない詩人自身の呆然自失した存在をうたった詩である。

春は社会であり、グレイにとって自分に対立するものである。それでいて、ある意味で、グレイの内を象徴するものであろう。それは彼が懐疑心、不快感をいだいている世界である。詩人はこの春の屋間の世界に居る。

While whisp'ring pleasure as they fly,  
Cool Zephyrs thro' the clear blue sky  
Their gather'd fragrance fling.

—ll. 8—10

(さわやかな西風は、喜びをささやきながら  
すき通った青空をそよそよと吹き  
集めて来た花の香をふりまく。—福原訳)

この「色めく年」(the purple year) の地上の生の営みは夢と果てる淡い「明」の世界である。「あたりは生きものに満ち」('peopled air'), 「忙わしいつづやき」('the busy murmur') にみちている。「明るいま屋の日光の中を」('among the liquid noon') 「派手に着飾った羽毛」('gayly-gilded trim') をつけた虫たちが、空とぶむなしい踊りをするとところなのである。それはグレイにとって世俗的世界を意味するのである。彼はこの喧騒な世界を空しいもの、'airy' (l. 39) なもの、本質的価値のないものとしている。

How vain the ardour of the Crowd,  
How low, how little are the Proud,  
How indigent the Great.

—ll. 18—20

(俗衆の熱意のいかに空しいことか、

高ぶるものいかに低く小さいことか、  
偉大なものいかにうつろなことか！)

Brush'd by the hand of rough Mischance,  
Or chill'd by age, their airy dance  
They leave, in dust to rest.

—ll. 38—40

(手荒な「不運」の手にはたかれて、  
あるいは年月に冷されて、虚空の踊りを  
彼等はやめて、土に眠る。)

これは「明」から「暗」への「失樂園」的転落のある世界であり、友や父と共にグレイが崩壊され喪失した華麗な安逸の世界なのである。

つまり、感覚的に言えば「暗」でなく「明」の世界であり、観念的には snobbery の世界であり、社会的には上流社会の世界である。

この「明」の世界、「むなしいよろこび」「無力な奢り」「はかなく無益な華麗の世界」を避けて、詩人はこの春のまっただ中—「明るいま屋の日光の中」—とは対蹠的な、およそ春とは縁遠い小暗いところに、独り自らを他と切り離して孤立させ、そこを自分の世界とし瞑想に耽るのである。この「明」なる外と一線を画する「暗」の世界<非顕現的世界>はグレイの避難所であり、同時に彼自身の存在を象徴しているのである。グレイは自分以外の全ての人を「明」の世界の存在と考え、自分だけはこの人目につかぬ、'sober' な、孤独の世界の存在としているのである。グレイはこの非世俗的世界にとじこもろうとしているのである。

Where'er the oak's thick branches stretch  
A broader browner shade ;  
Where'er the rude and moss-grown beech  
O'er-canopies the glade  
Beside some water's rushy brink  
With me the Muse shall sit, and think  
...

—ll. 11—16

(榎の木が、繁った枝をさしのべていて  
ほの暗く下かげのひろがるところ  
こけむして、あらくれたぶなの木が  
傘のように立つ森の空<sup>あ</sup>き地、  
葎の生えた水のほとりに  
ミウズの神と二人座って私は考えるのだ。  
—福原訳)

これこそグレイが閉籠ろうとした孤独の世界であった。彼はそこを自分の砦とし、refugeとした。この世界こそケンブリッジ大学<sup>19)</sup>であり、stoke Poges<sup>20)</sup>の田舎であり、‘a chuchyard’であり、‘owl’s solitary bower’<sup>21)</sup>であり、‘this neglected spot’<sup>22)</sup>であり、‘cool sequester’d vale of life’<sup>23)</sup>なのである。

グレイはここを喜憂のないところとしてえらび、明らかに非世俗的なものを求めようとしているのである。これはあのグランド・シャルトルーズでグレイが祈願した「世俗の騒がしさと人の煩いの心配のない、どこか人里離れた奥所」<sup>24)</sup>である。グレイは早速、詩において自分の願望を叶えた訳である。しかし、丁度、現実のグレイがグランド・シャルトルーズに留まり得なかったように、『春のうた』の詩の中のグレイもこの「ほの暗い」世界に必ずしも安心していないのである。専一に沈潜して行くところがないのである。

彼はここから専ら外界の華麗な生の営みを見つめているのである。事実、グレイは上記引用の6行以外には、自分の世界への言及を丸でしていないのである。内の自分の世界を見ることをしないのである。それは自分の世界に対する彼の自信のなさの感じを与えるのである。自分の世界に絶望しているようでもあるのである。まるでこのほの暗い自分の世界及びその中の自分の存在に対して何の望みも光明も見出していないし、また見出そうともしないのである。何の魅力も感じていないのである。少なくとも、それを感じさせないのである。自らえらんだ「ほの暗い」世界に対して不安をちらつかせているのである。それどころか、彼はその存在を半ば疑っている。外の世俗の世界を懐疑しながら、内の非世俗の世界をも懐疑しているのである。「ほの暗い」世界とその中の存在としての己とに対する疑念と否定的心とを覗かせているのである。それをグレイは茶化し気味に告白しているのである。

Thy Joys no glittering female meets,  
No hive hast thou of hoarded sweets,  
No painted plumage to display :

—II. 45—47

(お前のよろこびを満たす麗しい女もいない、  
蜜をたくわえた巣もお前にはなく、  
見せびらかす彩った羽もない。)

これは若きグレイの偽らざるものであったに違いないのである。25才の青年グレイが美しい女性や遠大な野心に心を動かさなかった筈はないことを物語っているのでは

る。自分で求めた「ほの暗い」世界を半ばつまらなく感じているのである。一方では喜憂のない所として離れることはできず、一方では喜憂への欲望は断ちがたいのである。ここにグレイの物質的側面と理想的非世俗的側面の共存を見ることができる。

これはグレイの矛盾であり、不安の現われである。自からの住する世界に何の魅力も感じないと云うことは、そこに矛盾、不満、不安の所在を暗示する以外の何ものでもない。非世俗の世界(理想的世界)に居ながら顕現性を現わしたいと願っている。隠遁しながら忘れられることをこわがっている。実際、彼は、M. Golden<sup>25)</sup>も指摘する如く、忘れられることを怖れることは人間の不可避の欲望としているのである。

「ほの暗い」世界を求めながら、そこに安住できないのである。このことは世俗の世界(眼前の春の世界)を避けながら、一方ではそれを求める自分の存在、つまり自己の内的矛盾、二面性の存在を証明するものである。そしてこの相矛盾し、相対立する二面を保有する一つの存在がその姿を現わさざるをえなくなった時、それは「一匹の孤独な蠅」と云う姿で現わされるのである。

このグレイの矛盾する内的二面性を例証する一つは Muse (詩神ミューズ) である。

With me the Muse shall sit, and think  
(At ease reclin’d in rustic state)

—II. 16. 17

(ミューズの神と二人座って私は考えるのだ。)

(「田舎びて身をらくに足を伸ばして」一福原訳)

この「ほの暗い」世界の中で詩人グレイにはミューズが同伴しているが、それは彼にとって単に(形通りの)道具立てにすぎず、意識的には全く抹殺されているのである。以後の作品で彼は彼女ミューズを連れ出しては瞑想するのであるが、これほど忘却したことはないのである。詩神ミューズとともにこの「ほの暗い」孤独の世界に徹し、それに専一に沈潜して、その中に自己を埋没して行くところは丸でないのである。悪意にとれば、それは傷心の自分(Walpoleとの喧嘩別れ、父の死などによる)が今破れて去って来たばかりの世俗的世界<「明」の世界>がこれ見よがしに(心の)眼前にちらついてならない—これを表向きは誹謗し揶揄し軽蔑し、その裏にある並みならぬこれへの関心と食指とを隠す魂胆があった、少なくとも彼の意識の深層にはそれがあったのちがいない。だからこそ詩神の世界の住人を装う<sup>26)</sup>必要があったのだとも云えるのである。最初からミューズなど

相手にする積りはなかった。只一途に華麗なる地上の世界をのみ相手としてじっと見つめているのである。ここに世俗に対するグレイの憧着性が紛う方なく見られるのである。

## 3

事実、この世俗への憧着はその「つつましい瞑想の目」に歴然としている。しかし、このグレイの内的一面を示す世俗の顕現性への憧着は単純な形では現われないのである。それは屈折した複雑な形で提示されるのである。それは一見それとは正反対の属性の背後に黒々と身をひそめて、決して表面にその姿を現わさない1つの実体としてしか示されないのである。

グレイの「つつましい瞑想の目」は軽蔑しながらも、常に自分の「ほの暗い」世界とは反対の世俗的世界に於ける顕現性（地上的華麗さ）にのみ専ら向けられているのである。「ほの暗い」孤独の世界から、春を謳歌し乱舞する虫ばかりを見ているのである。

Yet hark, how thro' the peopled air  
The busy murmur glows /  
The insect youth are on the wing,  
Eager to taste the honied spring,  
And float amid the liquid noon :  
Some lightly o'er the current skim,  
Some shew their gayly-gilded trim  
Quick-glancing to the sun.

—ll. 23—30

（だが、きけ、空気は生き物に満ち／忙しいつづやきに燃えている。／幼ない昆虫たちは飛び廻って／蜜のしたたる春に狂い／ま屋の日光の中に浮び漂う。／あるものは軽やかに水の流れをかすめ／あるものは、派手に着飾った羽毛を／きらきら太陽にかがやかせる。一福原訳）

ここに地上の世界の明るい側面（世俗的世界に於ける顕現性）に対するグレイの憧着性（強い関心）が示されている。だからこそ『エレジー』に於いて彼は「彼等は人生の冷たい奥まった谷に沿って／静かに人の世の自分の道を歩みつづけた」<sup>27)</sup>と言わざるを得なかったのである。

そして、人間とはこの昆虫のようなものだと云う。

To Contemplation's sober eye

Such is the race of Man :

—ll. 31—32

（「瞑想」のつつましい眼には／人間というやからはそんなものだ。一福原訳）

グレイの「つつましい目」は春の「派手に着飾った」虫たちの「きらきら輝やく」生の営みと人間のそれとの間に *analogy* を見出すのである。「ほの暗い」世界から春の生の営みに見入る瞑想の目は華やかな外観のみに注がれている。そしてその地上的華麗さ故に空しいとして、一途に軽蔑し拒否し斥けるのである。

And they that creep, and they that fly,  
Shall end where they began.  
Alike the Busy and the Gay  
But flutter thro' life's little day,  
In fortune's varying colours drest :  
Brush'd by the hand of rough Mischance,  
Or chill'd by age, their airy dance  
They leave, in dust to rest.

—ll. 33—40

（地に匍うものも、空を飛ぶものも、／その始まるころに終るのだ。／忙しいものも、派手なものも、／生のわずかな一日を、はためき廻るだけのことだ。／運命が色さまざまな衣をきせる。／荒っぽく不幸の手に払い落されたり、／歳月に冷されたりして、空にまう舞踏を／かれらはやめる、そして土に帰る。一福原訳 点線部分筆者訳）

価値なきものとして、世俗的地上的顕現性の否定にしゃにむに専心している。「すべて土に帰る」と云って地上の華麗な虫を軽蔑するのである。いかに輝やく羽毛を誇っていても、それは所詮「わずか一日の生にすぎないではないか」と云って嘲笑するのである。それは、Walpoleとの訣別や父の死によって脆くも安逸の生活を崩壊され、その結果、安逸の地上的世俗的華麗の世界を離れて、孤独と云う「ほの暗い」世界の中に、もはや一憂一憂することのない自己の世界を求めようとしているグレイ自身の、偽らざる一つの実感であったのである。そうしたグレイが春の虫達の安逸の世界に興ずるのを一種の羨望と自嘲的な気持をもって、空しい軽蔑すべきものとして斥けたくなるのも無理のないことではある。しかし、その斥け方、軽蔑の仕方にはなにか異常な片寄りが感じられるのである。無論、それによってグレイの虫を斥ける気持に変りがある訳ではないが、しかし何かをそ

の上に付け加えることにはなるのである。

瞑想は殊更に華やかなものの儚さ、空しさを強調している。人生は虫の生のように短い、だからはかないと云うのなら強調とも云えないのであるが、人生は短い、だから陽気で活発で華麗な生は儚いと「瞑想」は云うのである。少なくとも、そう云う感じを与えるのである。

Alike the Busy and the Gay  
But flutter thro' life's little day,  
In fortune's varying colours dress :

—ll. 35—37

明らかに目前できらびやかに乱舞する虫のことを云っているのである。しかしこの感じ方にはなにか一方的な所があって、詩人が思うほどの共感を得られないのである。なるほど、朝地上に現われて華麗に活動し、夕べには没する茅蠅ひぐらしのような生活は儚いに違いない。はかないのはそのような生活すべてがそうなのである。華美を装った者の生活だけが特にはかないのではないのである。この平明な論理を無理やりに押し込んだところがあるのである。華麗な生活がはかなくない訳では無論ない。しかし、それは華麗なるが故にはかない訳ではない。それなのに華麗なるが故にはかないと云うのである。少なくとも一読して、そう云う印象を強く残すのである。華麗な生活がはかなく空しいのは、その華麗さの為と云うより昆虫のその如き人生の短かさ、不可避の死のためである。従って「明」なる華麗の人生も「暗」なる詩人自身の人生も、ともに人生である以上、短かいと云う点では平等にはかなく空しい筈である。華麗な人生だけがはかないのでは決してない。

こんな論理に詩人グレイが気付かぬ筈はないのである。だから彼は「地をほうものも、空とぶものも、みなその始まる所に終るのだ」(ll. 33, 34)と云っておく必要があったのである。気付いていながら、あえて論理の押し込みをやり(詩人はその意識の所在によりよくこれを行なう)、華麗な人生ははかないと云うからには詩人グレイの胸奥にそうするだけのなにかがあるのである。

このような歪な形での自己弁明、自己憐憫は、自己の中に何か乗り越えるべくして在って容易に乗り越えられないものを外界に見出す時、狂的にとられる一つのストイックな構えなのである。グレイは「ほの暗い」孤独の世界に安心し、そこに己を徹しようとする。それなのに

徹することができない。それは誰か自分以外にいて、それが足を引っ張るのではない。引っ張るのは他でもない自分自身なのである。それこそ自己の内にある地上的華麗さ、世俗的顕現性への憧憬心に他ならない。でなくて、どうして自から世の煩わしさを逃れて「ほの暗い」世界へ入ったものが、今さら地上の「忙わしく陽気な」世界ばかりに関心を示し注目する必要があるのか。

明らかにそこには地上的世俗的物質世界の顕現性への憧憬があるのである。だからこそグレイはそのつつましい瞑想に於いて己のこの内的矛盾を暴露しなくてはならなかった。地上的華麗さの否定に歪な形で専心しているのは、世俗的自己(地上の顕現性へ憧憬する自分)をもみ消し否定しようとするグレイの腕もがきなのである。内的矛盾を克服しようとするグレイの姿なのである。

要するにグレイはこの詩に於いて、非世俗の世界に安住しようとする自分とこれを世俗的世界の観点(世俗的次元)から認識してしまうもう一つの自分との相対立する自己の存在を示しているのである。つまり自己の矛盾、不安を提示しているのである。「ほの暗い」世界(非世俗的世界)に在る自分が、他の自己、つまり世俗的自己、地上的華麗さの顕現性を求めようとする自己を、むきになって否定しようとしているのである。これはグレイの内的世界に於ける苛立ち、葛藤の一つの表わし方なのである。このグレイの矛盾、不安、苛立ちに満ちた自己の存在こそが‘a solitary fly’であり、そのsolitary flyによってこの不安、苛立ち、葛藤は更に明確に示されるのである。

詩人は世俗的自己(地上的生の営み—それは虫に代表されている—に憧憬する自分)を否定し斥けていた非世俗的理想的あるいは詩的自己(地上的華麗を否定し、ほの暗い世界に孤独を求める自己)を、最終連第5連に於いて、今度は逆に自分の斥け否定していたもの(世俗的自己)に否定させているのである。否定したものが今度はその否定した相手から逆に否定されると云う相打ちを許しているのである。これこそグレイの宙ぶらりんの不安、内的矛盾の決定的な告白なのである。

地上的華麗さ(世俗的世界)を否定しながら否定しえない、それどころか逆にそれによって否定されそうなのである。明らかにこれは不安であり、苛立ちであり、葛藤である。これを一身に象徴しているのが、他ならぬ「一匹の孤独な蠅」‘a solitary fly’なのである。「一匹の孤独な蠅」こそグレイその人である。

## 4

『春のうた』の不安は「暗」の世界（非世俗的世界）に徹底しようとして徹底できないことの不安である。それは最終スタンザに於いて、一層明確に *ironic* な自嘲的形で示されるのである。この自嘲的に示される不安は「一匹の孤独な蠅」 *a solitary fly* に集約されているのである。

非世俗的存在（詩人の内的一面）としてのうす暗いところに沈思する詩人は、世俗的存在（詩人の内的もう一つの一面）としての華麗な虫の生の営みを狂的なまでに軽蔑し、否定する。そして今度は逆に虫の方が詩人を軽蔑し、自からの存在を正当化するのである。

*Methinks I hear in accents law*

*The sportive kind reply :*

*Poor moralist ! and what art thou ?*

*A solitary fly !*

*Thy Joys no glittering female meets,*

*No hive hast thou of hoarded sweets,*

*No painted plumage to display :*

*On hasty wings thy youth is flown ;*

*Thy sun is set, thy spring is gone—*

*We frolick, while 'tis May.*

—ll. 41—50

(私の耳には聞える気がする、声をひそめて／遊び興ずるものたちが答えるのが。／あわれな道徳家よ、してお前は何か。／一匹の孤独な蠅じゃないか。／お前のよろこびを満たす美しい女もない、／蜜をたくわえた巣もお前にはなく、／見せびらかす彩った羽もない。／そそくさと羽撃いてお前の青春は飛んでしまった。／お前の太陽は沈み、お前の春はもう行ってしまった—／我々はうかれ騒ぐんだ、5月である間は。)

虫は、「ほの暗い」世界で楽しむことも遊ぶこともしない詩人を、「一匹の孤独な蠅」として嘲けり、自分達は短い生の限り楽しむと云う。この虫の反論が詩人の「瞑想」の論理に対して、出るべくして出たものであることは一読して明らかである。「瞑想」は前章で見た如く、人生は短かく死は不可避である、だから華麗に舞い踊ったところで仕方ないではないかと云うのである。ここにはグレイの短い人生を如何に生きるべきかの悩みが提起されていると言えるのである。

この瞑想の論理は、すでに前章でみた如く、幼稚極まりない、歪んだ論理である。むしろ、この虫の反論を作るがための論理とも言えるのである。世俗的存在としての虫はこの論理を梃子に自己主張をするのである。それは詩人の徹しようとして徹することができない不安、苛立ちを明示するために他ならない。隠遁をきめ込んで、虫は死を免れないのだからどんなに楽しんででも無駄だと云っている詩人だって、実は同様に死は免れないのだし、同様に短い一生であることに変わりはない。それなのに詩人には楽しむものも誇るものも何もないではないかと虫は云うのである。

*Thy Joys no glittering female meets,*

*No hive hast thou of hoarded sweets,*

*No painted plumage to display :*

—ll. 45—47

(お前にはよろこびを満たす美しい女などいない、蜜を貯えた巣もお前にはない、見せびらかす彩った羽もない。)

これは詩人の存在とその世界への不安を完全に暴露している。詩人が自分の世界に自若として安んずることができない理由の一つは、ここにあることを物語っているのである。「女」も「蜜」も「きれいな羽毛」もないのなら、それがあるだけ自分達の方がましではないかと虫達は云うのである。詩人はじっとして、あたかも、ただ死を待っているにすぎない生きた死人、忘れられた存在でしかない虫達は云うのである。

*On hasty wings thy youth is flown ;*

*Thy sun is set, thy spring is gone—*

—ll. 48, 49

(そそくさと羽撃いてお前の青春は飛んでしまった。／お前の太陽は沈み、お前の春は行ってしまった。)

これは「暗い世界」の存在としてのグレイの、終生つきまとった不安であったのである。彼は忘れられることを終生おそれているのである。忘却をおそれる心は何人も克服しえない人間の根元的欲望と考えていたのである。<sup>28)</sup> 『エレジー』にもこのことが十分認められるのである。

*For who to dumb Forgetfulness a prey,*

*This pleasing anxious being e'er resign'd,*

—ll. 85, 86

(誰か啞の「忘却」の餌食に甘んじて、  
この楽しい心配な人生をあきらめるものか。一  
福原訳 下線部筆者)

恐らくは、この「太陽の洗んだ」存在ほどグレイがおそれたものはあるまい。グレイの詩に於ける太陽のイメージを考える時このことは十分肯けるのである。非世俗的「暗」の世界にグレイが徹しようとして徹し切れない根源は、この「太陽の洗んだ」存在への恐怖感にあるのではないかとぼくは考えている。地上的顕現性への傾きもこれであると言えまいか。グレイは「暗い世界」へ逃避したその時から、自分を「太陽の洗んだ」存在としての意識にとりつかれているのである。そしてこれはグレイが終生背負って歩かねばならなかった十字架となるのである。「一匹の孤独な蠅」はこの十字架を背負ったグレイなのである。

虫は更に論をすすめて、限りあるわずかの生をじっとして楽しまないで愚となるよりは、生きている間だけでも大いに楽しみ遊んだ方がよいではないかと云う結論に達するのである。

We frolick, while 'tis May.

—1. 50

(我々はうかれ騒ぐんだ。5月である間は.)

これは瞑想の論理的当然の帰結であって、詩人は大して驚いてもいないのである。驚くどころか、このことによって、グレイは不安を強くはっきり表現しなかったのである。虫も同じ程度の説得力で自己を正当化しているのである。両方に各々の正当性を主張させることにより彼の内的二面性の葛藤、矛盾をそのまま映し出そうとしたのである。

M. Golden は詩人グレイは *mortal life* を如何に生きるべきかを問うているが、未解決であると云っている。<sup>29)</sup>成程、グレイは何の解答も得てはいない。しかし、「如何に生きるべきか」と云う問いの意味を Golden は詳らかにしていない。曖昧である。曖昧だがその意味を、短い人生を虫のようにおもしろおかしく生きべきか(一種のエピキュリアニズム)、それとも孤独の詩人(*retired poet*)のようにならず遊ばず地味に「ほの暗い」所で瞑想に耽って生きるべきか(一種のストイシズム)、つまり世俗的世界に生きるべきか、非世俗的(詩的、理念的)世界に生きるべきかの意味に、Golden は解しているように思われる。もしグレイがこの意味で

「人生如何に生きべきや」を己に問うているのなら、グレイは解答を見出したことにならなければならない。何故なら、「暗い世界」の詩人の非難を反駁して、虫が自己を正当化しているのであるから。しかもそれが詩人自身の瞑想の論理的帰結であるのだから。

しかし『春のうた』は、一読して明らかなように、両論相譲るところなく明解な解答に欠けているのである。春の陽は明るいけれども、何か気だるい不安な落ちつかぬ *feeling* でおおわれているのである。詩人が己の地歩を一步もゆずっていないことは確かなのである。

人生如何に生きるべきかと問うグレイは、虫のエピキュリアニズム(世俗的世界)か詩人のストイシズム(非世俗的世界)かの二者択一に窮しているのではないのである—そう云う不安のように見えるけれども、そうではないのである。ここにある不安はストイシズムに徹しようとしながら徹しきれない不安である。従って、グレイの問う *mortal life* を如何に生きるべきかという問題は、短い人生をストイシズム(非世俗的世界)の中でどうやって生きて行くべきかという意味なのである。『春のうた』が「暗」の世界(非世俗的世界、ストイシズム)に不安を感じ、それに徹底できないことを告白している所以である。

この如何に生きるべきかの問題に関しては、大方が二者択一の意味に解しているらしく、これに深く関係していないのである。Arnold's English Texts の『T. グレイとW. コリンズ詩集』の編者 A. Johnston もどうやら二者択一組らしい。彼は直接にはこの問題に触れていないが、この第5連の虫の自己主張について次のような短評を行なっている：

The neat turn at the end is unexpected, and dramatizes Gray's own uneasiness.<sup>30)</sup> (傍線筆者)

(最後のすばらしい逆転は意外であり、グレイ自身の不安を劇的なものにしていく。)

この論評は、明らかに「暗」の世界の正当性と「明」の世界の正当性とを劇的に対立させ、「暗」の世界に生きようか「明」の世界に生きようかという二者択一の疑問を示唆していることは間違いないのである。しかしグレイの疑問は、徹しようとして徹しきれない1つの世界、「暗」の世界(非世俗的世界)にどうやって徹するかというのであった。この「暗」の世界を離れることによって不安からの脱却をはかることがグレイにはできないのである。その世界の中でその不安を解消する他ないので

ある。従って、グレイには常に不安があるのであって、「明」の世界の否定は、徹しきれない「暗」の世界に徹しようとするグレイの腕<sup>もが</sup>きであり、徹しようとして徹しきれない己の世界の不安の表現なのである。

Johnston がグレイの不安を二者択一の不安だとするのはこの neat turn を‘意外’とすることにあるのである。なるほど劇的ではあるが、Johnston のいうようにそのどんでん返しは決して‘意外’ (unexpected) ではないのである。今まで躍気になって否定していたものが、反対に否定されるというのは確かに皮肉であり劇的である。そこには定まらぬ不安が存在することを明確にはするけれども、それは決して‘意外’ではないのである。と云うのは初めからこのグレイの不安は、一見自信にあふれ「田舎びて身をらくに足を伸ばしている」詩人の背後に横たわっており、その「ほの暗い」世界に安住しているかのごとく見える詩人の裏面には懐疑と不徹底が身を潜めており、又地上の華麗さを軽蔑する瞑想の目の中にはそれとは裏腹の「明」なる地上的顕現性への憧れが秘かに混じているからである。

Johnston に言わせれば‘意外な (unexpected)’ この逆転は、十分にぼくらには‘予想される (expected)’ ところであり、‘意外’でも何でもなし。むしろこの neat turn はすでに見たようにグレイの瞑想が論理の無理な押し込みをした、その当然の帰結であったのである。グレイが内包するもう一つの面(世俗的自己)が己の存在を主張したまでのことであって、それは容易に予想されることであったのである。

もし Johnston のいう如くこれを意外とするなら、「ほの暗い」世界から虫を見つめている詩人は自信をもって暗い孤独な世界に徹し、その軽蔑する目にいささかの羨望もあってはならない筈である。完全に安心の境地に入った詩人、つまり自己に対して絶対の自信をもった詩人が地上の華麗なる生の営みを空しいものとして達観し軽蔑している—そういう理解が Johnston にはなくてはならないのである。自信をもっているものが突然自信を喪失するところに意外性があるのであるから。これによる不安が投ずる<‘如何に生きるべきか’>の問いは、明らかに二者択一の問いである。つまり非世俗的世界に確たる自信をもつものが世俗的世界に否定されて突然その自信を喪失する時、(もしそこに生ずる不安があるとすれば)そこに生ずる不安は二者択一的不安である筈である。

ところがこの Johnston の理解から不安は導き出せないように思えるのである。私見によれば、Johnston の

批評は全く矛盾しているのである。仮に Johnston の理解に立てば、この詩におよそ不安というものを求めることは不可能になるのである。そこには恐らく孤高性を誇る詩人の安心感、虫に対する侮蔑感、人生の空しさなどが表わされるに違いないのである。何故なら自分に対して絶対の自信があれば、自分が軽蔑する虫などに否定されても豪も意に介しない筈であり、それどころかますますその独自性を意識し、自信を深めることになるからである。たとえば、『エレジー』に於ける swain's speech の中の異常な詩人の生活、「詩仙」の悪意にみちた世俗の tyrant への抵抗、「自画像」などに、それを見ることは容易である。

He had not the method of making a fortune :  
Could love, and could hate, so was thought  
somewhat odd ;  
NO VERY GREAT WIT, HE BELIEV'D IN A GOD,  
Sketch of His Own Character, ll. 2-4

(オレには世に出る術がなかった。/ただむき出しに愛することができ、憎むことができた。それで世間では幾分変人だと思われた。/大した<sup>あたま</sup>頭脳もなかった<sup>かみ</sup>ので、オレは本当に神聖なるものを信じていた。)

ところが、実際には、すでに見たように『春のうた』には安心はまるでないのである。たとえ、a solitary fly の中に、その予言性、暗示性を見出せたとしても、『春のうた』に横溢しその基調をなすものは、不安であり、苛立ちであって、孤高性など微塵もないのである。これは明らかに Johnston の論理の矛盾である。安心はグレイが後に達したものであって、この不安から安心への脱皮は『春のうた』以後のグレイの一つの重要な課題になるものなのである。

以上のことから分かるように、グレイの不安は「暗」の世界(非世俗的、理念的の世界)から「明」の世界(世俗的世界)へ逃亡しようとする‘意外’な不安、苛立ちではなくて、「暗」の世界に定着しながらそこに安住しようとして安住できない、これ以上行き場のない世界に徹しようとして徹しきれない諦観的自嘲的<sup>的</sup>不安、苛立ちであったのである。

A solitary fly !  
Thy Joys no glittering female meets,  
No hive hast thou of hoarded sweets,

No painted plumage to display :  
On hasty wings thy youth is flown ;  
Thy sun is set, thy spring is gone—

## II. 44—49

彼のこの徹しようとして徹しきれない不安は、「暗」の世界に「明」の世界を持ち込んだところにある。「明」の世界へのノスタルジアを吹っ切れないところにあるのである。「輝やく女性はいない」(I. 45), 「甘き菓はない」(I. 46), 「色彩あざやかな羽もない」(I. 47), 「太陽は洗んだ」(I. 49), 「五月の間中をうかれさわぐんだ」(I. 50)などに世俗的欲望は明瞭に現われている。非世俗的世界に居て、世俗的世界を、それと同じ次元で凌駕しようとするところに、グレイの悩みの深さがあるのである。

このグレイの内的世界を象徴する「一匹の孤独な蠅」‘a solitary fly’とは如何なるものなのか。明るく陽気な春爛漫のよろこびを満喫して虫が乱舞している中で、ひとり暗いところでじっとしている。じっとしてこれを空しいと考えている。

虫たちから見ればこうした詩人の存在は、ぼさっとして冴えない蠅のような、それもぶんぶんうるさく飛び廻るのではなく、じっと一ヶ所にとまって動かない蠅のように、つまらないものに見えるにちがいないのである。人生の明るい表の日に照らされることのない日陰者、あわれな裏街道的存在として映るのである。もはやその存在さえあってなきが如き存在である。取るに足らぬ存在、「ぶつぶついつも何やらたわごとをつぶやいて」<sup>31)</sup>ばかりいる存在、世間を離れて衆に混じらない存在—こういう存在に投げつけられた言葉が a solitary fly (「一匹の孤独な蠅」)なのである。

Poor moralist! and what art thou?  
A solitary fly!

## —II. 43—44

(あわれな道德家よ、してお前は何か。  
一匹の孤独な蠅じゃないか!)

これは確かに、虫から発せられたのであるが、しかし同時にそれはグレイが自分自身に向かって発したものであることは確かである。こういう虫はもはや虫ではない。

Methinks I hear in accents low  
The sportive kind reply :

## —II. 41, 42

(私の耳には聞える気がする、声をひそめて／遊び興ずるものたちが答えるのが。)

自分で自分がきいたようだというのである。他人には聞えなくても自分はきいたというのである。つまりそれは決して可視的自然界に起った物理現象ではなく、それは詩人の心の密室でふともれた呻き声であったのである。今まで自分の否定の対象であった相手から、自分が逆に否定されるのである。軽蔑しているものより、それよりはましだと思っているものよりだめだというのである。これほど皮肉なみじめな不安、いら立ちはないのである。これがグレイの不安である。蠅のもつ意味である。「一匹の孤独な蠅じゃないか」という声の中にぼくは、一方では自嘲のうす笑いをきく、そして今一方では不安と苦悶にゆがむ顔を見るのである。

「一匹の孤独な蠅」という時、そこには二つの意味が付与されているのである。それを発する方とそれを受ける方とでは、この蠅のイメージの意味するものが明らかに違うのである。

まず、‘solitary fly’だと発せられた時、この fly は非世俗的世界の存在としてのグレイを意味する。虫あるいは虫的グレイ(世俗的世界への憧憬を示すグレイの内的一面)が詩人的グレイ(世俗的華麗さを斥けるもう一つの内的一面、非世俗的自己)に向かって「蠅」という言葉を投げつけた時、この solitary fly は非世俗的存在、詩人的グレイ(「暗」の世界から世俗を軽蔑するグレイ)の蔑称として用いられていることは明らかである。「お前は一匹の孤独な蠅じゃあないか」といっている世俗的自己が、グレイ(非世俗的自己)に向かっていっているのであるから、この軽蔑は自己軽蔑である。「お前」というのは世俗的華麗さを否定していた詩人グレイ(非世俗的世界の存在としてのグレイ)のことであるから、発せられた時は、この「一匹の孤独な蠅」は非世俗的世界の存在としての詩人グレイ(非世俗的自己)を意味しているのでなければならない。そこには自己軽蔑、すなわち自嘲の意味が出てくるのである。自分は「一匹の孤独な蠅じゃないか」とせせら笑うグレイがここに居なくてはならない。華麗な虫の営みを笑う自分は本当に空しくないのでか、虫と同じじゃないかという自嘲は、同じ短い人生を「暗」の世界(非世俗的世界)で自分は如何に生きればよいか、どう生きることによって虫と区別されるか—そういう問題を提起しているのである。

次に、軽蔑として発せられた「蠅」を受ける時、それは世俗的世界の存在としてのグレイを意味するのであ

る。虫(世俗的自己)から投げつけられた a solitary fly が非世俗自己に受けとめられた時、それは他でもない自らが一途に否定し斥け軽蔑して来た、あの世俗的世界の存在(虫)としての意味をもって受けとられる筈である。「お前は一匹の孤独な蠅じゃないか」という言葉を受ける側から解すれば、お前とは自分であり、「俺」を意味する。その「俺」なる非世俗的世界の存在としてのグレイには、fly(虫の一つである)は軽蔑すべき世俗的世界の存在としての意味しか持たない。そこには明らかに狼狽があり不安が生ずる。この意味で受けとめられた a solitary fly が詩人グレイ(非世俗的自己)の内面にしみ込んで行く時、「おれはあのつまらない存在である虫、『一匹の孤独な蠅』ではないか」という不安の叫びとなるのである。それも「きらきら輝く羽毛」もない虫、眼前の虫よりも下等な存在ではないかという恐るべき不安が生ずるのである。

自分が無価値なものと思なしているもの(世俗的存在)と自分は同じではないか、このままでは居れないという不安、苛立ちがあるのである。それだけではない。自分は自分が無価値なものとする世俗的世界の存在以下ではないかという焦燥、不安、苦悩、絶望感があるのである。グレイにはこういう不安、苛立ちがあるのである。自分が軽蔑しているものより自分は劣っているのかも知れないという ironical な一種の被害妄想的な不安なのである。自分の「暗」の世界が世俗的「明」の世界から軽蔑されているのである。ここにどうしたらこの「暗」の世界に安心して生きられるかの問題が提起されているのである。

自分の心の中で自分にあざけりを発する‘ある世俗的なもの’をどうして満足させるか、どうやってこれを解消して行くかという意識がグレイにはあるのである。それはどうすれば虫からの嘲りを受けずに「暗」の世界で生きられるかの問題なのである。

つまり暗の世界、非世俗の世界に徹しようとして徹しきれない不安をグレイは告白しているのである。

最後にグレイの世俗性、非世俗性が a solitary fly という語そのものにも象徴され、暗示されていることを指摘して稿をおえたい。

‘solitary’ は多数からの遊離、隔離を意味するのであって、大衆からつまり世俗からはずれた世界を意味しているのである。fly は地上の生物であり、しかも人の居るところに大抵居る、歓迎されざる代ものである。すなわち俗物の代表であり、人間大衆、世俗の世界を表わ

しているのである。つまりそれはグレイの中にある世俗的、地上的顕現性への憧憬とそれを斥けようとする孤高性、換言すれば, worldliness と aloofness の二面を内包するグレイの存在そのものを象徴しているのである。同時にそれはその worldliness と aloofness との内的葛藤の消長をも象徴しているのであって、後にグレイが孤独な存在から孤高の存在へと脱皮することを暗示しているものである。

## 注

『春のうた』の text 及び手紙以外の T. グレイの著作からの引用は、すべて H. W. Starr と J. R. Hendrickson 共編, *The Complete Poems of Thomas Gray English, Latin, and Greek* (Oxford, 1966) によった。なお、テキスト和文訳にあたっては福原麟太郎訳(岩波文庫)を参照した。手紙は P. Toynbee, L. Whibley 共編, W. H. Starr 追加補正版, *Correspondence of Thomas Gray*, 3 vols. (Oxford, 1971) によった。

- 1) *Alcaic Ode*, 1. 11—20
- 2) 〔大意〕は上記 *The Complete Poems of Thomas Gray*, p. 152 の英訳によった。
- 3) the letter to West, Aug. 22, 1737: *Corr.*, vol. 1, p. 66. 大陸旅行出発(1739年3月26日)より2年前, グレイ20才の頃親友ウエストにあてた手紙。
- 4) “Proletarian Literature, by William Empson,” in *Twentieth Century Interpretations of Gray’s Elegy*, ed. H. W. Starr (Prentice-Hall, Inc., 1968) p. 109. Morris Golden がこのことは指摘している。Thomas Gray, by M. Golden, p. 70.
- 5) Morris Golden, *Thomas Gray* (Twayne Publishers, Inc., 1964), p. 98. ゴールデンは「全作品に自己を投影している」といっている。G. ハフも同様のことをいっている。Graham Hough, *The Romantic Poets* の翻訳書, 出口泰生訳『ロマン派の詩人』(弥生書房, 昭46年), pp. 7—30 参照。
- 6) M. Golden, *op. cit.*, p. 32.
- 7) the letter to Chute, from London, Sept. 7, 1741; *op. cit.*, vol. 1, p. 186: “the Boys laugh at the depth of my Ruffles, the immensity of my Bagg, & the length of my Sword. I am as an Alien in my native land, yea! I am as an owl among the small birds.”

- 8) 1725年イートン校在学時以来の友人
- 9) the letter to West, May 27, 1742; *op. cit.*, vol. 1, p. 209.
- 10) 一般に6月初めとされている。しかし、少なくとも5月のうちに書きはじめられたものであろう。“We frolick, while 'tis May. (“*Ode on the Spring*, l. 50) といっているから。ついでながら、前掲、注9)の‘5月27日’付けの手紙は後に Mason が数通の手紙をまるめたもので、引用の部分は5月中頃のものとする説がある。この手紙の後、それも余り遠くない後に書かれたのであろう。6月1日のウエストの死を知らずに、恐らく6月3日に「春のうた」を添えた手紙をウエストに書いているものと思われる (Corr., vol. 1, p. 213参照)。グレイは6月17日、友人アシュトンにウエストの死を確かめる手紙 (*ibid.*, pp. 213-14) を書いているが、その中でそれより数日前に、ウエストあての自分の手紙が開封されないまま返送されていたことを明らかにしている。この返送された手紙が問題のおそらく6月3日の手紙であることは間違いない。
- 11) 両親は期待していたらしい。R. W. Ketton-Cremer はその著書 *Thomas Gray, a Biography* (Cambridge Univ. Press, 1955) の中で、両親はそれを期待していたからこそ、息子の大陸旅行を簡単に認めたのだとして、次のようにいっている。and, after all, Sir Robert Walpole was still the greatest power in the land, and might be expected to have an eye to the future prospects of his son's closest friend. (p. 25)
- 12) 1757年
- 13) the letter to Mason of Dec. 19, 1759; *op. cit.*, vol. 2, p. 543. 及び M. Golden, *op. cit.*, p. 29.
- 14) text 和文訳中、(福原訳)とあるものはすべて、福原麟太郎訳、『墓畔の哀歌』(岩波文庫)から借用した。
- 15) *Long Story*, l. 82.
- 16) *Ode on the Prospect of Eton College*, l. 15.
- 17) *Hymn to Adversity*, l. 33.
- 18) *Elegy Written in a Country Church-Yard*, l. 93.
- 19) グレイはケンブリッジ大学では自分は孤独であるとか、あるいはそこは dull などところ (cf. *Hymn to Ignorance*) だとかいって不満をもらしながらも、休暇中の誰も居ないケンブリッジ大学は好きだといっている (the letter to Clerke of Aug. 12, 1760; *op. cit.*, vol. 2, p. 693.). 非難しながらも、世間の uncongenial turmoil からの refuge と考えているのである (the letter to Wharton, Aug. 5, 1763; *op. cit.*, vol. 2, p. 805.).
- 20) グレイの叔母夫婦 Mr. & Mrs. Rogers が Burnham から移り住んだところ (R. W. Ketton-Cremer, *op. cit.*, p. 55.) で、後に彼の母親もこの叔母と一緒に暮すに到ったところ。父の死以後のグレイの帰省先。『春のうた』もここで書いた。
- 21) *Elegy*, l. 11.
- 22) *ibid.*, l. 45.
- 23) *ibid.*, l. 75.
- 24) “... some secluded corner, ...in safety from tumult of the mob and anxieties of men.” (スター、ヘンドリクスン共編、『トマス・グレイ全詩集』, p. 152.)
- 25) M. Golden, *op. cit.*, p. 118. “Maaon, *Memoirs* (p. 203) にあるグレイの覚え書き”として、次のように書いている。It is impossible to conquer that natural desire we have of being remembered; even criminal ambition and avarice, the most selfish of all passions, would wish to leave a name behind them.
- 26) このことは後の『エレジー』に於ける脱皮をはやくも予言しているものとして見ることができる。
- 27) *Elegy*, ll. 75, 76.
- 28) 注25) 参照
- 29) M. Golden, *op. cit.*, p. 51.
- 30) Arther Johnston (ed.), *Selected Poems of Thomas Gray and William Collins* (Edward Arnold Ltd., 1967), p. 15.
- 31) *Elegy*, l. 106.

(昭和47年9月20日受理)